

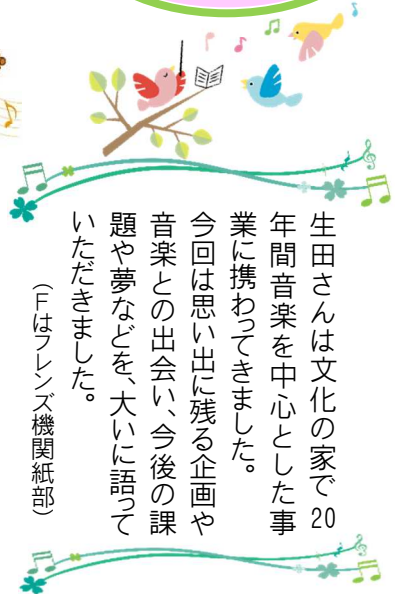
新春 インタビュー

クラシックのすすめ



いくた しょう 生田 創 さんを迎えて

文化の家事務局長補佐兼事業係長



生田さんは文化の家で20年間音楽を中心とした事業に携わってきました。今回は思い出に残る企画や音楽との出会い、今後の課題や夢などを、大いに話っていたいただきました。

(Fはフレンス機関紙部)

最初の仕事は『シャガール』

F 機関紙の「公演こぼれ話」では大変お世話になりました。早速ですが、文化の家の初仕事からお話していただけますか。

生田 僕は音響の技術者として入ったんですが、最初に企画制作でやった仕事は開館1周年記念の「シャガールの『ラ・フォンテーヌの寓話』をもとにした版画展」だったんです。

そのときまで舞台の現場の人間だったのでパソコンも

やったことないし、何か

らやっていたいかわか

らない状態でチラ

シを作ったり名古

屋市美術館の学芸

員に紹介文を頼ん

だり。そこからがス

タートでした。

年を重ねるとは美しい

F そのほか印象に残っているものはありますか。

生田 何といっても2004年の『蜜の歳月(としつき)』というコンテンツポラリィダンスの企画です。ダンサー振付の山田珠実さんによる「50歳以上の方々の日常の所作を生かした作品」で、年を重ねると、衰えるのではなくだんだん良くなっていく、今が蜜月のときだということをも身体表現したものです。

出演者を公募しても集まらないし、試行錯誤の連続でしたが、「長久手ですごく」とが始まった」と全国に広まり、とても評判になりました。

国際オペラ 音楽コンクール

生田 次は天下久深子先生と一緒に作った6回の「国際オペラ音楽コンクール」です。全く制作経験のないド素人が全国から人を集めること

から始めました。出場する人も審査員もすごく真剣で、緊張のある1週間を過ごし、

大変な試練でしたが得難い

経験をしました。

求めていたのは祈りの曲

生田 もうひとつは3・11のあとの企画です。何をしたらいいのか、音楽などやっていいのだろうか悩んだ末、12月にバッハの最高傑作といわれる「口短調ミサ曲」の公演をしました(オランダバハ協会)。そのときお客さまに「この音楽は祈りの曲なので、今まさにこういう作品を求めていた」と言われ、本当にやって良かったと思いました。

衝撃だった名フィル(名古屋フィルハーモニー交響楽団)の鑑賞会

F 生田さんはクラシックの知識が豊富ですが、どのようにして身に付けられたのですか。

生田 初めての出会いは毎週ミサで聴いた教会のバイオルガンでした。また、父がクラシックが大好きでレコードをたくさん持っていました。最初は関心がなかったんですけどね。ところが小学校5、6年のとき、名フィルの鑑賞会を聴きに行き、衝撃を受け、プログラムを見せたら父がカセットテープで曲

集を作ってくれたんです。それを毎晩聴きながら寝るのが習慣になりました。楽しくてその後も次々に作ってもらい、今度は好きな曲について詳しく知りたくなって、父の持っている音楽雑誌を読んだり、かなりの数の曲を聴いたりして知識を増やしていきました。

クラシックは身近なもの

F クラシックは何から聴いたらいいかわからないと、よく耳にしますが。

生田 クラシックは実は身近なものでCMなどで皆さんよく聴いているんですね。ただ曲名を知らないだけで。クラシックは関係ないとか敷居が高いとか先入観があり、身近にある音楽ということに気が付いていないだけなんです。それは橋渡しをしたり、好奇心をかきたてる「きっかけ」みたいな機会が足りないからなんです。

まずは「何か聴きたい」という気持ちがあることが重要です。激しい曲が好きだったりこの曲がどうも気になるとか(2面に続く)

